

# Theagenes の支持者層

清 永 昭 次

## はじめに

筆者は、年来、古拙期のギリシア史、とくに貴族政から民主政への過渡期のギリシア史を主要な研究対象としてきた。そこでの大きな研究テーマの1つは、いわゆる前期僭主政（以下たんに僭主政という）の問題であり、これまで、若干のポリスの僭主政についての研究を発表してきた<sup>(1)</sup>。僭主政は、軍事的・社会経済的に抬頭しつつある中流以上の平民と、経済的に没落しつつある下層平民が、弱体化しつつも、なお根強い勢力を維持している貴族と対立・抗争を深めていく状況の中から出現した独裁政であり、過渡期のポリス社会に特徴的な現象であった。僭主の地位を狙ったのは、野心的な貴族であったが、彼は、貴族政を打倒して僭主政を樹立するためにも、また、いったん樹立した僭主政を保持するためにも、支持者を必要とした。彼が求めた支持者は、ポリスの内外にわたっていたが、ポリス内では平民が彼の支持者層であった。彼も平民も、貴族を敵とする点で利害が一致したからである。

しかし、過渡期のポリスにおいては、平民が中流以上と下層の2つの層

に分化していたとすれば、僭主を支持したのは、平民のどの層であったのかが問題となる。この問題について、筆者は、従来、僭主政をめざす野心家が支持を求めたのは、中流（以上）と下層の平民、中流（以上）の平民、下層の平民とさまざまな場合があり、また、彼が僭主政を樹立してからの支持者層は、主として下層平民であったと考えてきた<sup>(2)</sup>。これは、いわば、それまでの通説の線に沿って、それを多少掘り下げたものであるが、実は、それに対して、1950年代から、僭主政成立の際、さらには僭主政一般の支持者として、そのポリスの重装歩兵層を考える説が現れてきた<sup>(3)</sup>。この説について、筆者は、1985年の口頭発表において予備的な検討を加え、自身の見解を変更する必要を認めないとの一応の結論を得た<sup>(4)</sup>。しかし、これは、なお十分な実証を経ない、その意味では暫定的な結論であり、個々の僭主政ごとに史料的な裏付けをとる作業がなされなければならない。本稿は、その作業を Megara の僭主 Theagenes の場合について行なおうとするものである。Theagenes を選んだのは、彼が、筆者がまだ本格的な研究を発表したことのない僭主の一人であるからであり、また、一般に分析の材料となる史料の乏しい僭主の中で、多少は手掛りとなる史料が存在しているからである。

## 1. Theagenes 以前の Megara

Megara の僭主 Theagenes の おおよその年代は、Athenai の Kylon との関係から定めることができる。Kylon は、Olympia 競技に優勝した Athenai の貴族で、Megara の僭主 Theagenes の娘と結婚していた。僭主政の樹立を企て、Theagenes から兵力を与えられて、Olympia 際の時に蜂起したが、失敗したと伝えられている<sup>(5)</sup>。Olympia 競技優勝者表に

よれば、Kylon は、第 35 Olympias, すなわち 640 B. C. の スタディオン 往復競走で優勝した<sup>(6)</sup>。彼の蜂起は、その後、例えば 632 B. C. あたりではなかったかと思われる<sup>(7)</sup>。彼は、それ以前に Theagenes の娘と結婚し、その結婚の時、Theagenes はすでに Megara の 僭主になっていたと考えられるから、Legon とともに、Theagenes の僭主政樹立の年は、640 B. C. ごろと推定するのが妥当であろう<sup>(8)</sup>。

しかし、Theagenes の支持者層を明らかにするには、直接的な関係史料を検討するまえに、少しく Megara の歴史を遡ってみる必要がある。

Ploutarchos によれば、むかし、Megaris では、人々は村々に分れて住み、市民は 5 つの部分に分配され、彼らは、Heraeis, Piraeis, Megareis, Kynosoureis, Tripodiskioi と呼ばれた。Korinthos 人は、Megaris の地 (hē Megarikē) を支配下に置こうと企て、彼ら相互に戦争をさせた<sup>(9)</sup>。この伝承は、古くは Megaris 地方が Heraia, Piraia, Megara, Kynosoura, Trpodiskos という 5 つの村落に分かれていたことを教えるとともに、Korinthos 人が Megaris の分断を図ったというのであるから、彼らが Megaris 支配を企てたころには、Megaris の 5 つの村落の政治的統合がすでにあった、すなわち、ジュノイキスモスによって Megara を中心市とするポリス Megara が成立していたことをも教えると解釈することができる。Megara におけるポリス成立の年代を正確に定めることはできないが、Legon は、その下限を前 8 世紀の半ばとしている<sup>(10)</sup>。以後の Megara のさまざまな出来事の年代と比較的よく調和することからすれば、このあたりに置くのが適当なところであろう。

Korinthos 人の Megaris 支配の企ての結末について、Legon は次のように論じている。まず、Heraia は、その名称からしても Hera 崇拝と関係があったが、のちの Megara 領には Hera 神殿がなかったのに対して、

Perachora 半島には 前9世紀後半に遡る Hera Akraia の崇拝があったから、Heraia は、この Hera Akraia 神殿の管理者たちの住む村として、Perachora 半島にあったであろう。また、Piraia という地名は、古典期の Megara とその付近には見当たらないが、これと極めて類似する Peraia という地名が、Perachora 半島全体と半島基部をさす名称として用いられているから、Piraia はすなわち Peraia と見て、結局、Heraia は Perachora 半島の西部、Piraia は半島の基部にあったと考えられる<sup>(11)</sup>。

次に、Hera Akraia の最初の神殿は、825—800 B. C. ごろに建てられ、725 B. C. ごろに崩壊または遺棄されたが、そこから約 200 メートル東に、750—730 B. C. ごろ Hera Limenia 神殿がつくられた。また、Hera Akraia 神殿で発見された陶器と金属製品は、Korinthos 製か、Korinthos 技術の影響を強く受け、Hera Limenia 神殿は、建設後数世紀間にわたり、増加の一途を辿った、大部分は Korinthos 製の陶器の保管所となった。このような発掘の所見は、Hera Akraia 神殿の管理が、シュノイクスモスとともに、Heraeis からポリス Megara の手に移ったが、Hera Limenia 神殿の建設、Hera Akraia 神殿の放棄のころに、その地の支配者が Megara 人から Korinthos 人に変った、との推測を可能にする。Hera Akraia 神殿の出土品に Korinthos の色彩が濃厚である点も、当時、Megara が独自の型の陶器を持っていなかったために、Megara 人も Korinthos の製品を奉献したのだと考えれば、この推測の妥当性を損うものではない。ここから、上述の Ploutarchos 史料<sup>(12)</sup>と、次に述べる Demon 等の史料を併せ参照すると、結論として、前8世紀前半に5村落の統合によってポリスを形成した Megara は、同世紀半ばごろに Korinthos の干渉を受け、その分断政策のために弱体化し、Heraia と Piraia を含む Perachora 半島一帯を奪われ、残る Megara 領も Korinthos に従属する地位に落とされた、

との経過を描きだすことができる<sup>(13)</sup>。以上のような Legon の議論は、細部はともかくとして、大筋においては妥当なもの認められる。

Korinthos によるこの Megara 支配の顛末を伝えるのは、前4世紀末のアッティドグラフォスの Demon である。彼によれば、Megara 人は、Korinthos 人の植民者 (apoikoi) であり、武力によって Korinthos 人に屈服させられていた、当時 Korinthos を支配していた Bakchiadai の誰かが死んだときには、Megara 人の男女は、Korinthos にやってきて、埋葬を手伝わなければならなかった、Korinthos の暴虐が満ちたとき、ついに Megara 人は蜂起した、Korinthos は使節を送り、Megara 人の民会で彼らを非難したが、Megara 人は使節を追い返した、戦いが起こって、Megara 人が勝ち、Korinthos 人を追跡して、彼らをうち殺した<sup>(14)</sup>。

この史料は、Bakchiadai が Korinthos を支配した前8世紀半ば以降の時期に、Korinthos が Megara 全域を武力で屈服させていたことを伝えるものであり<sup>(15)</sup>、上述の Legon の推測の関係部分<sup>(16)</sup>を補強するが、同時に、その Korinthos 人の Megara 支配が、Megara 人の武力蜂起によって互解したことをも伝えている。そして、その関連では、Megara の英雄 Orsippos に関する2つの史料が参考になる。

1つは彼の墓碑銘であり、「彼 (Orripos) は、敵どもが多く土地を切り取ったとき、最も遠い国境地方を祖国のために取り戻した」<sup>(17)</sup>と述べている。

もう1つは、Orsippos の墓を訪れた Pausanias の叙述で、「彼 (Orsippos) は、競技者たちが、古いしきたりに従って、競技会において腰に帯を締めていたのであるが、裸でスタディオンを走り、Olympia 競技会に勝った。また、この Orsippos はのちに将軍となり、近隣の人々の土地を切り取ったと言われる」<sup>(18)</sup>とある。

Orsippos は、第 15 Olympias、すなわち 720 B. C. のスタディオンの競走において優勝した<sup>(19)</sup>。Pausanias は、Orsippos の軍事的活躍を、Olympia での優勝後のこととしているが、Legon は、Pausanias のその見解を正當なものと認め、Orsippos が将軍として指揮をとった年代を、710—680 B. C. のあいだに置いている<sup>(20)</sup>。

また、墓碑銘の「敵ども」、Pausanias の「近隣の人々」が誰をさすか、直接的には明らかでない。Legon は、Attika, Boiotia, Korinthos の 3 者を可能性あるものとして挙げるが、結局、Korinthos 人が敵であったと結論している<sup>(21)</sup>。

Pausanias は、Orsippos が隣国の土地を奪ったように記しているが、彼の典拠は、他ならぬ Orsippos の墓碑銘だったのであろうから、事實は、墓碑銘が語るとおり、敵に奪われていた国境地方の土地を、Orsippos が奪回したということであろう。したがって、「敵ども」は、Demon 史料と並べてみると、やはり Korinthos 人と見るのが素直な解釈であろう。また、720 B. C. に Olympia で優勝したとき、Orsippos は、仮に 20 歳台の若者であったとすれば、彼が Korinthos 人をうち破ったのは、700 B. C. 前後と考えるのが適當であろう。

以上の考察から導かれる結論として、次のような事態が考えられる。Demon 史料が伝えるように、前 8 世紀の半ばすぎに Korinthos 人は Megara 全域を支配し、Orsippos の墓碑銘の語るところでは、そのうちの多くの部分、すなわち Perachora 半島一帯を直接の領土として切り取った。700 B. C. 前後に、Megara 人は、Orsippos の指導下に蜂起し、その後の Korinthos との国境線までの Megara 領における主権を回復した。しかし、その国境線が示すように、Heraia と Piraia を含む Perachora 半島一帯は、取り戻すことができず、その地域は引続き Korinthos 領のままに残った。

前8世紀の半ばすぎに、Korinthos 人が Perachora 半島一帯を Megara から奪ったとき、Heraia と Piraia の村人たちの多くは、残る Megara 領に難を避けたであろう。そのため、Megara は、突然、過剰人口の問題をかかえこむことになったにちがいない。その問題の有効な解決策の1つは、植民であった。Megara が最初に建設した植民市は、シンリー東岸の Megara Hyblaia であり、その年代は通常 730 B. C. ごろとされる<sup>(22)</sup>。Legon は、Megara は、国土回復が不十分に終わった結果、植民に乗り出さざるをえなくなったように述べているが<sup>(23)</sup>、Korinthos に対する蜂起を企てる以前に、Megara はすでに植民活動を始めたのである。

Megara Hyblaia に植民したのは、故郷の地を追われた Heraia と Piraia の村人を中心とする人々だったであろう。彼らは、次に、700 B. C. ごろの Orsippos の蹶起に期待したが、結局、Perachora 半島を取り戻しえないことが明らかになったとき、ふたたび植民の道を探るよりほかはないこととなった。

前7世紀の Megara の植民活動は、Propontis 方面に展開し、その世紀の前半中に、Chalkedon, Selymbria, Byzantion が次々に建設された。Chalkedon, Byzantion の建設年代は、通常、それぞれ 684 B. C. ごろ、659 B. C. ごろとされる<sup>(24)</sup>。また、Selymbria は、Byzantion より前の建設と伝えられており<sup>(25)</sup>、Legon は、Chalkedon より15年後ぐらいの建設であろうとしている<sup>(26)</sup>。これらの3つの植民市は、Perachora 半島一帯の最終的喪失にもとづく過剰人口対策として建設されたものであり、したがって、その基本的な性格は農業植民市という点にあったが<sup>(27)</sup>、Byzantion 建設後、前6世紀の半ばごろに Herakleia Pontika が建設されるまで<sup>(28)</sup>、約1世紀間、Megara の目立った植民活動はほぼ停止する。Legon が示唆するように、Perachora 半島一帯からの難民問題は、前7世紀の半

ばごろまでには一応解決したと見てよいであろう<sup>(29)</sup>。

以上のような農地を求める Megara の植民活動は、前7世紀に、Megara の交易活動、ひいては手工業生産を促進させるという結果を生んだ。Megara が Propontis や Pontos 方面から輸入した商品は、金属・木材、およびとくに穀物であり、見返りとして輸出した主要な商品は、毛織物と羊毛であったと考えられるから、Megara の牧羊業と毛織物業の発達を見ることとなったのである。また、交易の発展は、商業交易に携わる商人の群と、航海に従事する船乗りの群を生み、さらに造船業を発達させたであろう<sup>(30)</sup>。

牧羊業を営んだのは、貴族と平民の牧人・農民であった。彼らの中には、飼育した羊から得られた羊毛を用いて毛織物業に従事する者もあったであろう。しかし、毛織物業や造船業などの手工業・交易商業・海上運輸といった方面の仕事に携わったのは、ほとんどが平民の商工業者であった。彼らの一半は、もともと商工業や海上運輸を業とする者であったが、農牧業から転じてきた平民も少なくなかったであろう。安価な輸入穀物の圧力を受け<sup>(31)</sup>、あるいは、貴族の農業・牧畜経営の前に敗退した農民・牧人は、没落農牧民としての生活を続けるのでなければ、商工業や海上運輸に生計の途を求めるほかはなかったからである。

これらの商工業者や船乗りとしての平民は、活動の場を得るために次第に中心市 Megara や、その外港 Nisaia に集中するようになった。彼らの一部は、成功して富裕になった<sup>(32)</sup>。より多くの者は、生活に多少のゆとりを持つ中産者層を形成した。しかし、彼らの大半は都市の貧困者層を構成したであろう。従来、中心市 Megara に住んでいたのは、政権を独占する貴族と、彼らに奉仕する平民の商工業者や奴隷であったが、前7世紀のうちに大量の平民が流入して、都市の様相の顕著な変化をひき起こしたので



ある。

植民活動の結果、過剰人口の問題は一応解消したとは言っても、農民・牧人の生活が安定したわけではなかった。すでに述べたように、彼らを経済的に没落させる危険は小さくなかった<sup>(33)</sup>。それらの危険を克服して、先祖伝来のクレーロスを維持した中産的な農民も少なくはなかったが、貧窮に陥った下層の農民・牧人はもっと多く、しかも、彼らのうちで商工業に転ずることなく、農牧生活に踏みとどまった者も少なくなかった、というのが実情だったのであろう。

経済的に安定ないし富裕化した中流以上の平民の立場をさらに強化したのは、重装歩兵の密集隊戦術の導入による彼らの軍事的役割の増大であった。Greenhalgh によれば、Korinthos 式の壺絵に重装歩兵の密集隊戦闘が描かれるようになるのは、675 B. C. ごろからであるから<sup>(34)</sup>、Legon が、Korinthos の新戦術に対応するために、Megara でも前7世紀の半ばごろまでにはこの戦術を採用せざるをえなくなったと推定しているのは<sup>(35)</sup>、妥当である。貴族は、ポリスの軍事の独占という従来の体制を崩すことを欲しなかったが、彼らだけでは十分有効な密集隊を組むことができなかった。他方、中流以上の平民ならば、重装歩兵の武器を購入して密集隊に加わることが可能になった。もちろん、彼ら平民たちには、訓練と実戦のために彼らの生活を支える経済活動が阻害されることを望まない気持があった。しかし、結局、貴族は平民にも密集隊戦闘への参加を求めざるをえず、中流以上の平民たちもそれに応えた。こうして、前7世紀の半ばごろから貴族とともにポリスの軍事を分担することとなった、Megara の中流以上の平民は、必然的にその立場を強化することとなったのである。

前7世紀の Megara における経済の新しい展開は、1つの社会層としての中流以上の平民の成長を促した。彼らは、新しくポリスの軍事にかかわ

ることによって、さらに力を増した。彼らは、やがて、貴族が独占する政権への参加を貴族に対して要求するようになった。一方、彼ら中流以上の平民の下には、貧困な下層平民が、より広い社会層として存在した。彼らは、前7世紀の Megara に生じた経済の波に乗りこなれて取り残され、あるいは、その波に呑みこまれて没落した農民・商工業者等であった。彼らは、彼らを圧迫する富裕な貴族や平民に対して、その経済的困窮からの解放を要求するようになった。これに対して、平民の要求の矢おもてに立たされた貴族は、なお強固な勢力を保持していた。しかし、前7世紀の Megara の商工業や海上運輸の発展は、彼らの経済的地盤沈下に導かざるをえなかった。軍事の独占が破れたことも、彼らには打撃であった。

こうして、弱体化しつつある貴族に向かって、成長しつつある中流以上の平民が政治的要求を、没落しつつある下層平民が経済的要求をぶつけて、貴族と平民の党争が生ずるという、貴族政から民主政への過渡期のポリスに広く見られた現象が、前7世紀の Megara においても進行した。その世紀の半ばには、Megara でも 僭主政の成立する条件が成熟したのである。

## 2. Theagenes の支持者層

前節で述べたように、Theagenes が Megara の僭主になったのは、640 B. C. ごろと考えられる<sup>(36)</sup>。彼の社会的身分について、直接に語る史料はない。しかし、Theagenes がもし平民であったならば、すでに Megara の僭主として権勢をふるっていたとしても、Athenai の貴族であった Kylon が、Theagenes の娘と結婚する気持にはならなかったであろう<sup>(37)</sup>。また、Aristoteles は、古い時代には、将軍となって軍事的能力を発揮した者の

中から僭主が多く出たと述べ、その中に Theagenes を含めているように見える<sup>(38)</sup>。貴族政期の Megara でも、將軍職につくことができるのは、もちろん、貴族に限られていた。これらの点を考慮すれば、Theagenes を Megara の貴族の一人とみなすことに、異論はないであろう。

Theagenes が、貴族政を打倒して僭主政を樹立するにあたって、それを維持するあいだにも、彼が求めた支持者層は、当然、Megara の平民であった。それは、中流(以上)の平民であったか、下層平民であったか、あるいは、その両者であったか、可能の限り検討してみよう。

Theagenes が僭主になった事情を伝えているのは、上記の Aristoteles である。彼は次のように述べている。「古い時代に、同一人が民衆指導者 (dēmagōgos) かつ將軍 (stratēgos) になったとき、(国制は) 僭主政に変化した。古い僭主のほとんど大多数の者が、民衆指導者から生まれたからである。……当時は、民衆指導者は、將軍職をつとめる者 (stratēgountes) から出た。……また (de), 僭主政は、以前はいまより多く生じたが、それは、重要な官職が (megalai archai) 若干の人々の手に委ねられたからである。……なおまた (eti de), 当時はポリスは大きくなく、民衆 (dēmos) は田園 (agroī) に住み、仕事 (erga) に従事して暇がなかったので、民衆の指導者 (prostatai tou dēmou) は、戦争に熟練 (polemikoi) すると、僭主政を目ざした。彼らはみな、民衆 (dēmos) に信頼されて、それをなしとげた。そして、(彼らが得た) 信頼は、富裕者に対する(彼らの)敵意(によるもの)であった (hē de pistis ēn hē apechtheia hē pros tous plousious)。例えば、Athenai では、Peisistratos は、……、また、Megara の Theagenes は、富裕者が、彼らの畜群を川のほとりの自分のものでない土地で放牧しているところをとらえて、それらの畜群を殺し (kai Theagenēs en Megarōis tōn euporōn ta ktēnē aposphaxas, labōn para ton pota-

mon epinemontas)<sup>(39)</sup>、また、Dionysios は、……。」

文脈は必ずしも明瞭ではないが、Theagenes に関して、彼は、將軍職について民衆指導者となり、一方では、軍事的功績によって名声をあげ、他方では、富裕者への敵意によって民衆の信頼をかちえて、僭主となった、富裕者への敵意は、具体的には、彼らが自分のものでない土地で飼っていた家畜を襲って、これを屠殺することによって示された、という脈絡を想定することができるであろう。

Ploutarchos によれば、Athenai で Solon が登場する以前に、Megara は Salamis 島を占領し、以来、Athenai は、島の奪回のために Megara と長期の戦いを続けた<sup>(40)</sup>。Legon は、Megara による Salamis 島占領が、Theagenes が僭主になるまえか、彼の僭主政のあいだに起こった可能性を示唆するが<sup>(41)</sup>、もしこれを受け入れれば、Theagenes の將軍職や軍事的功績は、Salamis 島占領、ないし、その後の対 Athenai 戦にかかわるものとの想定が可能となり、それが彼の名声を高め、民衆指導者から僭主への道を切り開く大きな契機になった、と想像することができる。この想像を直接裏付ける史料はないが、いずれにせよ、彼の將軍職や軍事的功績が、民衆指導者から僭主へとつながったことは、考えてよいであろう。しかし、軍事的功績によって得られる名声は、全市民的なものだったはずであるから、この面から、僭主の地位を狙う彼の支持者層を特定することは困難であろう。

上記の Aristoteles 史料に関連して、Legon は、Theagenes が襲った畜群は、主として、あるいは、全部羊であり<sup>(42)</sup>、Theagenes は、公的な資格において畜群を攻撃し、畜群の所有者である富裕者は、川のはたりの問題の土地で畜群を飼う権利はなく、彼ら富裕者は、貴族と平民の両者を含み、当時、有力な家畜所有者と貧しい牧人・農民のあいだには緊張があっ

たであろうと述べている<sup>(43)</sup>。

攻撃された畜群の主体を羊と見ることは、すでに想定された Megara における牧羊業と毛織物業の発達<sup>(44)</sup>に照らして、自然な推測である。また、攻撃された畜群の所有者が、貴族を中心としつつも、一部の富裕な平民をも含んでいたことは、彼らが「貴族」でなくて、「富裕者」と呼ばれている以上、当然であろう。しかし、彼らには、川のほとりの問題の土地で畜群を飼う権利がなかったか否かについては、検討の余地がある。

富裕者が彼らの畜群を飼っていた土地は、Aristoteles 史料の “epine-montas” に対して Liddell-Scott の与えた訳語にしたがえば、彼らにとって「他人の土地」であった。したがって、それは、ポリスなどの公有地か、彼ら以外の平民の私有地だったであろう。後者であれば、彼らには、もちろん、その土地で家畜を飼う権利はなかった。しかし、前者であれば、そこには Megara 市民の共同用益権があり、富裕者にも、当然、その権利が与えられていたであろう。

問題の土地の性格をこのように考えていくと、攻撃された富裕な畜群所有者と緊張関係にあったのは、貧しい牧人・農民であったか否かについても、見通しが立てられるように思われる。

その土地が、ポリスなどの公有地であったとすれば、富裕者は、その共同用益権を独占して<sup>(45)</sup>、彼ら以外の平民を閉め出したために、Theagenes の攻撃を受けたのであろう。その場合、用益権を利用することができるか否かは、家畜を持つ貧しい牧人・農民にとっては、いわば死活問題であった。したがって、富裕者の不法行為は、とくに彼らにとって大きな打撃であったにちがいない。

また、問題の土地が、富裕者以外の平民の土地であったとすれば、その平民は、中流ではなく、下層の平民だったであろう。中流平民は、重装歩

兵の武器を保持していたから、富裕者も、彼らの土地を不法に使用するようなことは慎んだと思われるからである。したがって、富裕者は、貧しい牧人・農民の土地を勝手に占拠して、家畜を飼ったであろう。

このようにして、いずれにせよ、富裕者の違法行為の犠牲となったのは、下層平民としての牧人・農民であったから、富裕者と緊張関係に立ったのも、当然、彼らであった。それゆえ、彼らは、Theagenes が富裕者の畜群を攻撃したとき、彼の背後にあって、これを支持したであろう。ここに、彼が僭主になるまえの支持者層として、下層平民としての牧人・農民の存在が明らかになるのである。

Theagenes の畜群攻撃は、公的な資格においてであったか否かは、検討中の Aristoteles 史料だけでは判断できないが、その手掛りを与えるもう 1 つの Aristoteles 史料がある。それは、『弁論術』の 1 節で、「例えば、Dionysios は、護衛兵 (phylakē) を要求するから、僭主政を企てているということ。なぜなら、Peisistratos も以前に企てて、護衛兵を要求し、それを得ると僭主になったし、Megara の Theagenes もそうだったから」<sup>(46)</sup>と述べられている。Theagenes は、護衛兵を要求して認められ、それを得てのち僭主になったというのである。

Meyer と Legon は、Theagenes が護衛兵を得たのは、彼の畜群攻撃のちのことと解しているが<sup>(47)</sup>、妥当な見解である。たしかに、畜群攻撃の前には、Theagenes には護衛兵を要求する適当な口実がなかったであろうが、攻撃後は、畜群に大きな損害を受けた富裕者たちからの復讐を受ける危険にさらされ、護衛兵を求める理由ができたと思われるからである。

Aristoteles は、Athenai の Peisistratos と Theagenes を実例として並置しているから、Peisistratos が護衛兵を手に入れたいきさつ<sup>(48)</sup>によって、

Theagenes の場合を類推するとすれば、Theagenes が護衛兵の要求を認められたのは、Megara の民会においてだったであろう。しかし、当時、Megara の民会を制していたのは、Theagenes に対して敵意を燃やす富裕者だったはずであるから、彼の要求は、容易には承認を得られなかったであろう。たしかに、富裕者は、家畜を飼うにあたって不法をあえてしていたが、Theagenes が、私的な資格において彼らの家畜を攻撃したのであれば、彼らは、Theagenes の行動の違法性を主張して譲らなかったであろう。しかし、彼が公的な資格において行動し、そのために身辺が危険になったとの主張が民会でなされたのであれば、富裕者にとっても、それに反駁を加えることは困難だったであろう。しかも、彼ら自身、違法行為を犯していたから、強く反論することがいっそうむずかしく、結局、Theagenes の要求は、民会の承認を得ることとなったのであろう。

こうして、Theagenes の護衛兵獲得は、彼の畜群攻撃が公的な資格において行なわれたとの推測に、1つの根拠を提供するが、その他にも、僭主政樹立前の Theagenes の支持者層に関して、1, 2 重要な示唆を与える。

第1に、Theagenes が手に入れた護衛兵は、主として中心市の下層平民から選ばれ、経済的に困窮している商工業者に働き口を得させることになったであろう。したがって、彼らは、当然、Theagenes に対して好意を寄せるようになったと考えられる。護衛兵の獲得は、都市の下層平民としての商工業者を彼の支持者にするという効果を持ったのであり、ここに、僭主政樹立を狙う Theagenes のもう1つの支持者層として、中心市の下層の商工業者を想定することができるのである。

第2に、Theagenes の護衛兵獲得は、僭主になるまえの彼にとって、中流平民は、彼の主たる支持者層ではなかったことを示すと言うことができ

る。もし、中流平民が彼の主要な支持者であったならば、彼は、彼らの武力を当てにすることができたから、そのうえさらに護衛兵を求める必要はなかっただろうからである。もちろん、彼らも、貴族の政権独占には不満を抱いていたから、僭主の地位を狙う Theagenes の反富裕者的・反貴族的行動には好感を持ったと思われるが、その支持は、消極的なものにとどまったと見るのが妥当である。

以上、僭主になるまえの Theagenes の主要な支持者層として、貧しい牧人・農民・商工業者といった下層平民の存在を浮かびあがらせることができた。そして、その周辺には、消極的な支持者としての中流平民の層があったと考えられるのである。

僭主政樹立後の Theagenes の唯一顕著な国内政策として知られるのは、彼が、中心市 Megara に水道と泉屋をつくったことである。これについて、Pausanias は、僭主になった Theagenes が、中心市 (polis) の向こうの山々から流れてきていた Sithnidai nymphai の水の水路を曲げ、多数の柱を持つ、美しく大きな泉屋を建て、これにその水を引いたと伝えている<sup>(49)</sup>。Legon によると、この泉屋は、アゴラの北、Megara の2つのアクロポリスのあいだにあり<sup>(50)</sup>、Meyer によれば、貯水槽は、底面が19×13.70メートルで、2つの区劃から成り、北側から地下の水管によって給水され、水深は約1.5メートル、30本の8角柱によって屋根が支えられていた<sup>(51)</sup>。

Legon は、Theagenes による給水施設の建設は、成長しつつある都市住民への彼の共感の表明であり、同時に、多数の労働者に多年にわたる働き口を提供したと述べているが<sup>(52)</sup>、大筋において正当な評価であると言ってよい。中心市に住んでいた貴族を主体とする富裕者は、僭主政の成立とともに、ほとんどが殺害、あるいは、亡命したはずであるから、Theagenes の僭主政のもとで中心市に住んだ市民の大部分は、中流・下層の平



民の商工業者だったであろう。Theagenes の 給水施設は、都市生活 にとって不可欠の水の供給を確保するとともに、中心市の美化にも 一役 買う ことによって、その恩恵に浴した中流・下層の平民の商工業 者の 心 に、Theagenes に対する好感をよび起こしたであろう。また、下層の商 工業 者は、働き口を得て、生活の向上・安定をおし進めることができたであろ う。このように考えれば、Theagenes による給水施設の建設は、中心 市 の中流、および、とくに下層の平民の商工業者を僭主政の支持者にすると いう効果を生み<sup>(53)</sup>、また、Theagenes 自身、その効果を狙って給水施設 をつくったのだとすることができるのである。

僭主政樹立前に Theagenes が獲得した護衛兵は、僭主政期間中も維持 されたであろう。そして、ときどき護衛兵の交代ないし更新が起こったと 考えられるが、その場合、新規の護衛兵は、引続き、中心市の下層平民、 すなわち、貧困な商工業者を中心に選ばれて、彼らの生活を支える一助と なり、やはり、彼らを僭主政支持者としてつなぎとめるのに役立ったであ ろう。

中心市の商工業者に対する僭主 Theagenes の 政策として、その他には 何も伝えられていない。また、田園地帯の牧人・農民に対する政策につい ては、伝承は全く沈黙している。例えば、土地の再分配が行なわれたか否 か、史料のうえからは確かめることができない。しかし、僭主政の成立と ともに、富裕者の多くが死亡ないし亡命したとすれば、前6世紀初頭の Athenai において Solon が断行した負債の切り捨ては<sup>(54)</sup>、Megara にお いては自然に行なわれ、それによって、富裕者に債務を負っていた多くの 貧しい平民が救済されたであろう。Legon が言うように、僭主 Theage- nes は、一部の他のポリスの僭主と違って、後の Megara の民衆のあいだ でヘーロース的な人物としての尊敬を受けなかったことを考慮すると、支

持者である下層階級の要求に十分こたえるだけの政策を行なわなかったのかもしれないが<sup>(55)</sup>、彼が、僭主として平民、とくに下層平民の味方であることを彼らに印象づけるにたる姿勢を示したことは、間違いないように思われる。

僭主 Theagenes の国内政策に関する史料が乏しい原因の1つは、彼の僭主政の期間が短かったことにあると考えられる。彼の僭主政が長く続かなかったことは、Aristoteles の叙述から窺える。そこでは、少数の長く続いた僭主政の例を挙げて、多くの僭主政が全く短命であったことが述べられているが、Theagenes の僭主政は、長命の例に入っておらず、他方、18年間続いたにすぎない、前5世紀前半の Syrakousai の僭主政でさえ、長命の例に挙げられているのである<sup>(56)</sup>。

Theagenes の僭主政の崩壊に導いた直接の誘因は、Kylon の反乱の失敗だったであろう。Thoukydides によれば、Kylon は、Delphoi の神託を伺ったのち、Theagenes から兵力（dynamis）を受け、仲間（hoi philoi）を説得して、Olympia 祭のときに Athenai のアクロポリスを占拠して、僭主政を樹立しようとした。ところが、Athenai 人は、それを聞くと総出で田園からやってきて、彼らを包囲した、しかし、時がたって多くの者は包囲に疲れ、9人のアルコンに後事を託して帰ってしまった。一方、Kylon と彼の弟は脱出に成功したが、他の者たちは窮地に陥り、なん人かは餓死するというありさまになったため、アクロポリスの Athena 女神の祭壇にすがって、女神の庇護人となった。後事を託されていた者たちは、庇護人に害を加えないからと約束して、彼らをその座から立たせ、外に連れだして殺した、ある者たちは、途中、Erinyes 女神の祭壇にすがったが、彼らも殺された<sup>(57)</sup>。

Theagenes が Kylon に援助を与えた理由は、Legon が論ずるように、

Salamis 島の領有、ないし、Eleusis の帰属をめぐる敵対関係にあった隣国 Athenai に、Megara に友好的、しかも従属的な政治体制を樹立させ、Athenai との紛争を有利に解決しようとしたところにあったであろう<sup>(58)</sup>。しかし、Kylon の反乱が失敗に終わった結果、Theagenes の目論見も挫折しただけでなく、彼の政治的威信も大いに傷つけられることとなった。彼が Kylon に提供した兵力は、おそらく護衛兵の中から選ばれたであろうが<sup>(59)</sup>、Kylon の反乱の経過を見ると、彼らの大部分も反乱失敗の犠牲となったようなので、この事件直後の Theagenes は、とくに弱い立場に陥ったにちがいない。もちろん、彼は、穴のあいた護衛兵は、中心市の下層平民によって速やかに補充したであろう。しかし、蜂起した Kylon に対して、Athenai 人は、9 人のアルコンを始めとして、すべて反乱の鎮圧に立上ったから、Theagenes に対しても、当然、強い敵意を持ち、Theagenes 打倒の企てに対しては喜んで援助を与えたであろう。したがって、Kylon の事件の直後か、それから余り時を経ないで、Theagenes の僭主政打倒の動きが Megara 人のあいだで起こり、たぶん Athenai の援助も得て、打倒に成功したのではないと思われる<sup>(60)</sup>。前節で述べたように、Theagenes が僭主になったのが 640 B. C. ごろ、Kylon の反乱が 632 B. C. ごろとすれば<sup>(61)</sup>、Theagenes の僭主政打倒は、遅くとも前 620 年代初めまでには起こったものと考えられる。結局、彼の僭主政の期間は、せいぜい 10 年余りであり、そのような短期間では、彼は、平民、とくに下層平民のための政策を十分に展開することができなかったのであろう。

Ploutarchos は、Theagenes の僭主政の崩壊と、それに続く時期の Megara の状況について、次のように伝えている。「Megara 人は、僭主 Theagenes を追放して、しばらくの間 (oligon chronon)、国制に関して思慮深かった。それから、Platon の言葉によれば、民衆指導者 (dēmagōgoi) が、

彼らに沢山の生のぶどう酒を注いだので、彼らは完全に墮落させられ、他の点においても富裕者（plousioi）に対して極端な振舞いに及んだが、貧民（penētes）は、彼らの家に行き客となり、贅沢な食事をすることを要求した。もしありつけなければ、彼らは、すべての人を暴力的に、また傲慢に扱った。ついに、彼らは決議して（dogma themenoi）、彼らが払っていた利子を要求して、債権者から取り戻し、この出来事を“利子返還（palintokia）”と呼んだ<sup>(62)</sup>。」

この史料によれば、Theagenes の僭主政は、彼の暗殺ではなくて、追放によって結末を告げた。Ploutarchos は、Theagenes を追放したのは「Megara 人」であり<sup>(63)</sup>、彼らが、その後しばらくは思慮深い国制を布いたと伝えているが、彼の叙述の流れからすると、この「Megara 人」とは、富裕者のことと理解してよいであろう。とすれば、彼らは、Theagenes の僭主政樹立前に Megara の政権を独占していた貴族のほか、一部の富裕な平民を含み、彼らのうちで、Theagenes が僭主になるとともに亡命した者たちが、Kylon の反乱の失敗を機として、Theagenes 打倒を図り、遅くとも数年のうちにそれに成功して、彼の僭主政前の貴族政に代って、Megara に寡頭政を樹立したのだと想定することができる。

Ploutarchos によれば、この寡頭政は、思慮深い寡頭政であった。おそらく、それはいわゆる穏和寡頭政であり、中流平民をも政権に与からせる寡頭政だったのではあるまいか。僭主 Theagenes は、もちろん、彼らの支持をも得ようと努力したにちがいない。給水施設の建設は、そのような努力の 1 つとしての意味をも持っていた<sup>(64)</sup>。また、中流平民も、対立していた富裕者の中心である貴族の政権を打倒した Theagenes に対して、少なくとも当初は、むしろ好意的だったであろう。しかし、僭主としての彼の政策は、すでに見たように、中流平民よりは下層平民の利益により多

く合致する傾向を示したようであり<sup>(65)</sup>、彼の僭主政は、所詮、彼ら中流平民の政治的要求を満たすことができなかったから、やがて、彼らのあいだには、Theagenes に対する不満が生じてきたであろう<sup>(66)</sup>。したがって、富裕者が、護衛兵の武力と下層平民の支持に頼る Theagenes 打倒に立上ったとき、中流平民もこれに協力し、Theagenes 追放後に成立した寡頭政に与かることが認められたのではないか、と思われるのである。

Ploutarchos によれば、貧民、すなわち下層平民は、この寡頭政から排除されたが、やがて、民衆指導者に煽動され、富裕者に対して暴力的かつ傲慢に振舞うようになった。彼らは、決議して、債権者からの「利子返還」を強行したというから、富裕者たちから政権を奪って、Megara の支配者となったのであろう。同じく Ploutarchos は、他の個所において、Megara で起こった出来事として「“利子返還 (palintokia)” と “神殿略奪 (hierosylia)” を行なった放埒な民主政の時に云々」<sup>(67)</sup>と語っているが、彼は、思慮深い寡頭政に続く Megara の貧民の支配を「放埒な民主政」と呼んだのだと見てよいであろう。この民主政が成立した時期について伝える史料はないが、Ploutarchos が、その前の思慮深い寡頭政の期間を「しばらくの間」と言っていることからすれば、遅くとも前 610 年代には民主政になったと考えてよいように思われる。したがって、Megara の下層平民は、Theagenes の僭主政が倒れたのち 20 年たらずのうちに、富裕者から政権を奪うだけの力を持つようになっていたのである。

Aristoteles は、Megara の民主政について、それが無秩序 (ataxia) と無政府状態 (anarchia) のために崩壊した、亡命先から戻ってきた知名の士 (gnōrimoi) が民衆 (dēmos) と戦って勝ち、彼らのあいだから役人を選んで寡頭政を樹立した、と述べている<sup>(68)</sup>。この民主政は、おそらく、Ploutarchos が伝える放埒な民主政と同じものであろうが、それが崩壊し

た時期は不明である。しかし、Aristoteles の叙述は、その民主政の継続期間がそれほど長くなかったような印象を与えるから、遅くとも 590 B.C. ごろまでには、寡頭政にとって代られたと見て、大きく誤ることはないであろう<sup>(69)</sup>。したがって、思慮深い寡頭政ののちの Megara の民主政も、およそ 20 年ほどしか続かなかったのであるが、それだけの期間でも政権を維持したということは、僭主 Theagenes の政策によって、下層平民の、とくに社会経済的な力が増大したことを示すものであり、この事実からも、彼の僭主政の期間を通して、Megara の下層平民が、Theagenes の支持者としてとどまったことが推測されるであろう<sup>(70)</sup>。

## おわりに

すでに述べたように、Legon は、僭主政樹立前の Theagenes の支持者層は、貧しい牧人と農民であり、僭主政期間中は、下層階級であったとしている<sup>(71)</sup>。Schachermeyr は、僭主政樹立前の Theagenes は、貧しい農民の利益を擁護して、民衆の信頼を勝ち得、また、彼の僭主政は、Korinthos の Kypselos や、Athenai の Peisistratos の支配と同様であったと述べている<sup>(72)</sup>。この 2 人は、Theagenes の支持者層として、主に下層平民を考えていると言ってよい<sup>(73)</sup>。

他方、Jeffery は、僭主になるまえの Theagenes が、民衆の支持を得たと述べている<sup>(74)</sup>。また、Meyer は、支配貴族と、成長しつつある中心市の住民および農民との対立の中で、Theagenes は、民衆の指導者として独裁政治を樹立したと説いている<sup>(75)</sup>。Jeffery は、中流・下層の平民を一括して Theagenes の支持者層と見ているが、Meyer は、むしろ中流平民が彼を支持したと理解しているようである。

Theagenes の支持者層について、このようにさまざまな見解が存在する状況において、本稿の到達した結論は、彼が僭主になるまえの時期については、中流平民が消極的な支持者として存在しつつも、主要な支持者層は下層平民であり、この関係は、彼が僭主になってからも、基本的には変わらなかった、下層平民は、短い彼の僭主政の全期間を通じて彼の支持者層としてとどまったが、中流平民のあいだから、時がたつにつれて彼に対する不満が次第に生じ、結局、最終的には僭主政打倒の側についた、というものである。すなわち、下層平民を主体として Theagenes の支持者層を考える立場であり、したがって、僭主の支持者層について、重装歩兵となることのできる中流平民を想定する見解は、Megara の Theagenes の場合には、部分的にしか妥当しないと考える立場である。

史料の乏しさのために、本稿において導きだされた結論には、実際の事実からの多少の乖離があるかもしれないが、全体的な方向の正しさは認めてよいであろう。しかし、僭主政の支持者として、一般的に重装歩兵層を指定することができるかどうかについての決定的な結論を出すためには、まだ明らかにされていない他のポリスの僭主の場合の検討を重ね、事例を蓄積することが不可欠である。その作業を続けることを今後の課題としたい。

## 注

- (1) 「ソロンの国制におけるティメーマに関する一考察」『史学雑誌』68-3, 1959, p. 1-33, 「ペリアンドロスの奴隷取得禁止令」『歴史学研究』294, 1964, p. 1-13, 「ポリュクラテスと商業」『学習院史学』1, 1965, p. 72-87, 「ミュティレネの僭主と調停者」『学習院史学』16, 1980, p. 3-25.
- (2) 「国制推転のダイナミズム」『岩波講座世界歴史』1, 1969, p. 480-2 参照。

政権を掌握したのちの僭主の支持者層は、「主として下層平民」であって、中流（以上）の平民が含まれた可能性を全く排除するというのではない。

- (3) E. g. A. Andrewes, *The Greek Tyrants*, 1956, p. 34-8; A. Snodgrass, *Archaic Greece—The Age of Experiment*, 1980, p. 111-2; J. V. A. Fine, *The Ancient Greeks—A Critical History*, 1983, p. 108.
- (4) 「前期僭主の支持者層」『学習院史学』24, 1986, p. 57-8.
- (5) Herodotos 5, 71; Thoukydides 1, 126.
- (6) J. Rutgers (ed.), Sextus Julius Africanus; *Olympionicarum Fasti*, 1862, p. 13.
- (7) E. g. A. W. Gomme, s. v. Cylon, in *Oxford Classical Dictionary*, 2 ed., 1970, p. 305.
- (8) R. P. Legon, *Megara—The Political History of a Greek City-State to 339 B. C.*, 1981, p. 93-4.
- (9) Plout., *Moralia* 295 B, *Quaestiones Graecae* 17.
- (10) Legon, p. 53-4, cf. 69.
- (11) Legon, p. 49-50. なお、ポリス Megara を構成する5つの村落から, Heraia と Piraia を除いた3つの村落のうちの Kynosoura を, Legon, p. 53は, 仮に Megaris 北東部の Pegai と Aigosthena 間の地域と推定している。残る2つの村落である Megara と Tripodiskos は, Megaris 中央部にあった。
- (12) p. 3 参照。
- (13) Legon, p. 66-9.
- (14) F. Jacoby, *FGH* 3B. 327. Demon (von Athen?) F 19.
- (15) Bakchiadai が Korinthos を支配した時期は, F. Kiechle, s. v. Bakchiadai, in *Kleine Pauly* 1, 1975, col. 809-10によれば, 伝承上は 748-658 B. C. である。この年代を認めれば, Korinthos の Megara への干渉は, Bakchiadai が, Korinthos に寡頭支配を樹立してのち間もなく, 彼らの手で始められたと推測することができるであろう。
- (16) p. 4-5 参照。
- (17) *IG* 7, 52, 1. 3-4.
- (18) Paus. 1, 44, 1.
- (19) Rutgers, p. 6.
- (20) Legon, p. 63.
- (21) Legon. p. 63.
- (22) E. Meyer, *Μέγαρα*, *R. E.* 16, 1931, col. 183.



- (23) Legon, p. 70. なお, Legon, p. 71-6は, Megaraの Megara Hyblaia 植民の年代を, 前8世紀の第3四半世紀に正しく置いているが, Legon, p. 63, 70の発言は, それと矛盾する。
- (24) Meyer, col. 183.
- (25) C. Müller, *Geographi Graeci Minores* 1, Anonymus (Scymnus Chius ut fertur), *ΠΕΡΙΓΗΓΗΣΙΣ* 715-6.
- (26) Legon, p. 79.
- (27) Legon, p. 78-9.
- (28) Meyer, col. 183.
- (29) Legon, p. 81.
- (30) Legon, p. 86-9. なお, Plinius, *Naturalis Historia* 7, 196は, 縮絨の技術の発明者を, Megara人 Nikiasと伝えている。
- また, Legon, p. 120-1は, Megara艦隊が28隻の Samos艦隊と戦って敗れ, 600人の捕虜を出したことを伝える Plout., *Mor.* 303 E-4 C, *Quaest. Gr.* 57にもとづいて, この時 (Legonによれば600 B. C. ごろ) の Megara艦隊を構成した五十桡船の数は, Samos艦隊のそれに匹敵, あるいは上まわったかもしれないと述べている。前7世紀の Megaraの造船業の規模を推測する1つの手掛りとなるであろう。
- (31) Legon, p. 90.
- (32) Megaraの没落貴族であった抒情詩人 Theognisの活動年代は, 通常, 前6世紀の半ばとされるが, Legon, p. 110-111は, これを前7世紀末に上げることがを提案している。それを認めれば, 例えば, Theog., *Elegeia* 53-60は, 前7世紀の Megaraの都市貴族が, これまでは中心市の中に入ってもこなかった平民が, 貴族のように振舞っているのを眼前にしたときの嫌悪の気持を吐露したものと見るができる。
- (33) p. 8 参照。
- (34) P. A. L. Greenhalgh, *Early Greek Warfare—Horsemen and Chariots in the Homeric and Archaic Ages*, 1973, p. 73-4.
- (35) Legon, p. 92.
- (36) p. 2-3 参照。
- (37) p. 3 参照。
- (38) Arist., *Politika* 1305a.
- (39) epinemontasの意味については, Liddell-Scott, *A Greek-English Lexicon*, s. v. ἐπινέμω, turn one's cattle to graze on another's land, Arist. pol. 1305<sup>a</sup>

Theagenes の支持者層 (清永)

26 を参照。

(40) Plout., *Sol.* 8.

(41) Legon, p. 101.

(42) Legon, p. 88.

(43) Legon, p. 96.

(44) p. 8 参照。

(45) L. H. Jeffery, *Archaic Greece—The City-State c. 700-500 B. C.*, 1976, p. 156 も、富裕者は、共有放牧地を囲い込み、そこで彼らの畜群を飼っていたのだと考えている。

(46) Arist., *Techne Rhetorike* 1357b.

(47) Meyer, col. 184; Legon, p. 96-7.

(48) Arist., *Athenaion Politeia* 14, 1, cf. Hdt. 1, 40, 1; 41, 2.

(49) Paus. 1, 40, 1; 41, 2.

(50) Legon, p. 97.

(51) Meyer, col. 176. なお、Legon, p. 151 に写真が掲載されているが、彼の説明によれば、現存の遺跡は、500 B. C. ごろに建設されたものである。また、F. Schachermeyr, *Theagenes*, *R. E.* 5A, 1934, col. 1345 によれば、この泉屋の遺跡は、Delbrück と Holzmöller が調査して、その結果を 1900 年に発表したものであるが、Schachermeyr も、これが、Theagenes の建設した泉屋そのものの遺跡であるか否か、決定を留保している。

(52) Legon, p. 97-8.

(53) A. R. Burn, *The Lyric Age of Greece*, 1960, p. 248 も、Theagenes の給水施設は、中心市の貧民にとくに評価されたと指摘している。

(54) Arist., *Ath. pol.* 6, 1; Plout., *Sol.* 15.

(55) Legon, p. 98.

(56) Arist., *Pol.* 1315b. なお、Schachermeyr, col. 1342 は、Aristoteles は、彼の用いた史料に Theagenes の僭主政の期間が記されていないなかったので、その名を挙げなかったのだと解しているが、そのように仮定する必要はないであろう。

(57) Thout. 1, 126.

(58) Legon, p. 110-1. ただし、彼は、Eleusis の帰属をめぐる紛争とのかかわりについては、やや懐疑的である。

(59) Schachermeyr, col. 1344. なお、註 (66) をも参照。

(60) ただし、Schachermeyr, col. 1342 は、Kylon の反乱直後の Theagenes の

僭主政打倒という仮定に確実性はない、と述べている。

- (61) p. 2-3 参照。
- (62) Plout., *Mor.* 295 C-D, *Quaest. Gr.* 18.
- (63) ただし、p. 19 で述べたように、その際、Athenai 人が彼らを助けた可能性は十分あると考えられる。
- (64) p. 16-7 参照。
- (65) p. 16-8 参照。
- (66) もし、彼ら中流平民が、Salamis 島や Eleusis をめぐる Athenai との戦いに、重装歩兵として参加させられたとしたら、そのような祖国への貢献にもかかわらず、政権参与の要求が容れられないことに対する彼らの不満は、いっそう大きくなったであろう。ただし、Theagenes が僭主になったのちも、彼らが自らの武器を保持し続けたか否かは、疑問である。Arist., *Pol.* 1311a も、武器の取上げを僭主の常套手段の 1 つとして挙げており、Theagenes も、彼の僭主政をより安全にするために、市民の武器を没収したかもしれない。そして、ふだんはそれをポリスの倉庫に保管しておき、必要の時にだけ、彼ら各自に返して使用させたのではないかと想像される。また、彼の僭主政打倒のために蜂起した市民は、もちろん、まず彼らの武器を取り返したであろう。
- (67) Plout., *Mor.* 304 E, *Quaest. Gr.* 59.
- (68) Arist., *Pol.* 1300a, 1302b, 1304b.
- (69) Theagenes の僭主政が倒れたのち数十年間の Megara の歴史の激しい動きについては、Theognis の抒情詩の分析をも含めて、詳細な検討を要するが、ここでは、Theagenes の支持者層を明らかにするのに必要な限りでの、大雑把な枠組みの提示にとどめる。
- (70) ただし、註(68)で引用した Aristoteles は、知名の士によって打倒された放埒な民主政の担い手を、「民衆 (dēmos)」と呼んでいる。これは、民衆指導者の煽動を受け、下層平民を主体にして成立した「放埒な民主政」が、その途中から中流平民をも共同の政権担当者として受け入れたことを示唆するように思われる。
- (71) p. 12-3, 17-8 参照。
- (72) Schachermeyr, col. 1341-2.
- (73) P. N. Ure, *The Origin of Tyranny*, 1922, p. 267-8 は、Theagenes は、Megara の毛織物業の独占をめざして富裕者の畜群を攻撃したとし、また、僭主となった彼を支持したのは、労働者階級であったと述べている。これも、Theagenes の支持者層として下層平民を考えている説と見てよいであろう。

Theagenes の支持者層（清永）

（74） Jeffery, p. 156.

（75） Meyer, col. 183-4.

（史学科 教授）